



入学試験問題
国語

函館ラ・サール高等学校
2025年2月13日

〔問題〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

死ということは人類にとっての大きい課題である。動物のなかで自分が死すべき存在であることを自覚しているのは、おそらく人間だけであろう。死をどう受けとめ、どう理解するか、ということから宗教が生まれてきた、ということもできる。考古学の調査によっても、人間は相当古い時から、葬送の儀礼をもっていたことがわかる。

そんなに古い時のことを考えなくとも、私が子どもの頃の祖父は、まだ地獄や ゴクラク のことを信じていた、と言える。死んで浄土に行くということは、相当に強い願いであり、信念でもあった。来世の存在に対する確信が今世の生を支えていた。キリスト教国においても、「復活」ということが信仰のなかで重要な意義を占めている。死後に復活し最期の審判を受ける。このことがこの世に生きる生の在り方を支えていた。

多くの宗教が教えるところは、死を単純な「終わり」として見るのではなく、ある人の存在は死によって完全に消滅してしまわない、という点にある。死に対するそのような確信が、その人の生の在り方に強い影響を与えるのである。「死生観」という表現があるのも 肯ける ことで、死と生とをまったく切り離して「観」ずることは不可能なのである。

このような死生観の形成において、生と死との微妙なバランスを保つことはなかなか困難なことである。前近代の日本においては、その比重が死の方にかかっていったように思われる。「いかに死ぬか」、あるいは、もっと積極的に「いかに美しく死ぬか」ということが、生の目標と考えられるほどになる。武士の場合は、これが特に強かったと思う。① 森鷗外の「阿部一族」などには、死を指して生きる武士の姿が見事に描写されている。

キリスト教文化圏においては、死後生について考えるにしろ、それは「一回限りの復活」なので、生きることの方に比重が強くなっていく。輪廻転生などしないのだから、この一回かぎりの生をいかに生きるかが、極めて大切になる。その上、キリスト教の生み出した、ある意味では「鬼子」とも言える自然科学が、生きることの比重をますます大にした。自然科学と結びついたテクノロジの発達によって、人間はこの世での生を一挙に快適に効率よくすることができた。しかし、それによって生を謳歌できる分だけ、② 死に対する「観」は急に貧困化した。現代の自然科学の知識をもちつつ、地獄、天国の存在を簡単に信じるのは難しいだろうし、一回限りの復活の信仰をしっかりとつことも難しいのではないだろうか。

一九九〇年の三月、アメリカのニューポートで行われた「死ぬことの難しさ」という変わった題目のもとに行われたシンポジウムに参加したことがある。a これは医療技術の急激な発展により、人間は相当に延命できるようになった。しかし、そのために随分と「死ぬことが難しくなっている」という認識によって企画されたシンポジウムである。参加者に保険会社の人が居て変な気がしたが、理由はすぐわかった。アメリカのすべての人ができる限りの延命装置をつけるようになる、そのコストは莫大となり、破産してしまうというのである。c この人はその計算を丹念にして、驚くべき数値を示してくれた。

それでは、いつ誰がどのようにして延命にストップをかけるのか、という難問が生じてくる。医者、弁護士、牧師、などの人々が B センモンの立場から、この問題を真剣に論じた。論理的に合理的に論を進めていき、これらの人々は、あれも考えられるこれも考えられるとした後に、結局のところは明確な答えはないという結論を出した。

「異文化からの発言」という趣旨で私は最後に発言した。「皆さんが死に対してこれほど真剣に討論されることに深い感銘を受けた。しかし、皆さんがいくら努力されても結論は出ないであろう」と、私は次のように述べた。ここに論じられたのはすべて近代の「いかに生きるか」という考えに基づいており、その延長上で死のことを考えようとしている。従って、結論が出ないのも当然である。やはり「いかに死ぬか」という見方、人生を死の方から見る態度も必要なのではないか。ただし、「いかに死ぬか」の方に C ヘンチヨウしすぎた人生観が、どれほど馬鹿げた結果を引き起こすかを、私は日本人として、戦争中に身をもって体験してきた。従って、日本がいいとか東洋に見習えなどとはあまり言う気がないし、現代の日本も近代の圧力によって、死の問題に混乱が生じていることも知っている。現代は、いかに生きるかだけではなく、いかに死ぬかを同等の重みをもって考えねばならないのではないか。以上のようなことを例を交えながら話したが、立ち上がって拍手してくれる人があるほど、好感をもって受け入れられた。

ところで、日本の現状はどうであろうか。日本においても西洋近代のもたらした影響は極めて大きい。それに先にも少し触れたように、軍閥による死の強調の D フモウさを経験した後だけに、敗戦以来今に至るまで、ひたすら便利で物の豊かな生を追求してきて、昔からある、^③ 日本人の死に対する知恵は忘れたような状態になってしまった。

近代科学は、これまであちこちで論じてきたように、研究する人と研究される現象との間に明確な切断があることを前提としている。そのようにしてこそ「」な結果が得られ、誰でもがそれを利用できる。それを基にして発達し

たテクノロジも、操作する人と操作される機械との間に明確な区別があり、従って、操作する人はマニュアルに従ってさえおれば、誰でも同じ結果を得ることができるといえる。これは実に素晴らしい方法を考え出したものである。

しかし、このような考えがあまりにも有効であるので、人間が人間のことを考えるときにまで適用するという失敗を、近代人は冒してきたのではなからうか。医学の例をとってこれを考えてみよう。近代医学の方法によると、研究者は人間の人体を客観的対象として研究し、それによって多くの成果をあげた。このため多くの病気を治すことが可能になった。しかし、この方法をそのまま医療に応用すると、われわれが患者となって入院すると、一人の人間としてよりは、一個の身体として扱われているように感じることがある。それでも、これで病気が治る場合は辛抱もすることだろう。

しかし、一人の人間にとって極めて重大で、極めて個人的なことである「死」に対しても、このような方法によってアプローチされてくるとなると、これは大いに考え直すべきではなからうか。いかに効率のよい生を生きるかという観点から導かれた方法を、そのまま死に対して適用していいのだろうか。

現代における死の問題を考える上において、やはり柳田邦男の「二人称の死」という考え方は注目すべきではないだろうか。つまり、自分にとって大切な妻とか子どもとかの死——二人称の死——を、近代医学の扱っている三人称の死——自分と無関係の人の死——とまったく同列に考えていいのだろうか、という疑問である。《4》

既に述べたように、近代科学の特徴は、その研究者と研究対象との間に関係が存在しないことを前提としている。それは、自分と関係のない「もの」あるいは「第三者」のことを扱っている。そして、繰り返すようだが、このようなアプローチによって近代医学がめざましい進歩を遂げていることも忘れてはならない。しかし、これはあくまで人間をいかに長く生きさせるか、という目的意識においてなされてきた営みであり、その方法や考えの文脈のなかで「死」ということも考えられることになる。つまり、それは生きることの終わりという意味で、人間一般についての死を明確に定義できるであろうが、それはあくまで、三人称の死なのである。

これに対して、私が「私の死」をどう受けとめるか、というのには「一人称の死」であって、近代医学の問題ではない。それは、まったく一回限りの事象であり、私が私の死をどう受けとめるのかという点で、観察者と現象とは切っても切れぬ関係にあり、近代科学の方法論はまったく通用しない領域である。《5》

これには宗教がかかわって来ざるを得ない。

一人称の死の問題はしばらくおくとして、二人称の死はどうであろうか。この問題を提出するに際し、柳田邦男は極め

て具体的な自分の体験を基にして語っている。だからこそそれは非常に説得力のあるものとなっている。柳田邦男『犠牲
—— わが息子・脳死の11日』（文藝春秋社）から引用しよう。

「私と賢一郎（柳田氏の長男）がそれぞれに洋二郎にあれこれ言葉をかけると、洋二郎は*脳死状態に入っているのに、
いままでと同じように体で答えてくれる。それは、まったく不思議な経験だった。おそらく喜びや悲しみを共有してきた
家族でなければわからない感覚だろう。科学的に脳死の人はもはや感覚も意識もない死者なのだと説明されても、精神的
な命を共有し合ってきた家族にとっては、脳死に陥った愛する者の肉体は、そんな単純なものではないのだということを、
私は強烈に感じたのだった」。

この文は極めて重要なことをわれわれに伝える。柳田邦男は自然科学の知識を十分に持った人である。従って、脳死が
科学的に死であることを容認するかも知れない。しかし、彼が言いたいのは、脳死状態にある息子が「体で答えてくれる」
事実が厳然と存在するということである。

既に述べてきたように、ここに言う「科学的に」とは、対象と無関係であることを前提にした発言である。👉 それに
対して、柳田が「愛する者の肉体」と呼ぶとき、「喜びや悲しみを共有してきた家族」としての関係を前提としてい
る。④「感覚も意識もない」から死者などという「単純なもの」ではない。

もっと不思議なことが起こった。脳死後の九日目に柳田邦男が洋二郎の集中治療室を訪れると、血圧と心拍数が急にあ
がったのだ。看護婦さんも「さっきまで血圧は一二〇台、心拍数は五〇台だったのに」「お父さんが来たら、急に上がった
わ」と驚く。血圧一四〇前後、心拍数六〇台へと急上昇する。まさに「体で答えてくれ」ているのだ。

このような不思議なことが生じるための、もうひとつの条件として、洋二郎の入院した病院の医療体制があると思われる。
柳田邦男の記述している、洋二郎を担当した富岡医師や看護婦さんたちの姿は感動的である。この人たちは「脳死し
た身体」を近代医学的に操作しようとしているのではなく、自分たちと「関係のある人」として、心から接している。柳
田は富岡医師に感謝して次のように言っている。

⑤「現代の医療は死を敗北としてとらえ、勝点をあげることばかりに目を向けていますよね。救命の努力はもちろん重
要ですが、救命できない場合でも、医療者には大事な仕事があるはず。先生は確かに洋二郎の命を救えなかったけれ
ど、彼がよりよい最期を迎え、私たち家族がその彼の最期を援けてやれるだけの十分な時間を創ってくれました。看護婦

さんたちのひたむきであったかいケアや私たちへの励ましは、私たちにとってかけがえのない支えでした」。

ここで柳田は「医療」というものの重要性を的確に述べている。近代医学の発展は大切なことであるが、それを実際の場に生かす「医療」においては、医療従事者と患者との間に関係が存在し、それを大切にすることによってこそ仕事が生かすものである。そのような態度がしっかりと身につけている限り、死は必ずしも敗北ではない。二人称の死を意味あるものとするためには、その二人称の関係を暖かく取り巻く関係が必要なのである。

(河合隼雄^{はやお}『日本人の心のゆくえ』より)

*脳死状態：脳幹を含む、脳全体の機能が失われた状態。回復する可能性はなく、元に戻ることはない。薬剤や人工呼吸器等によつてしばらくは心臓を動かし続けることはできるが、やがて(多くは数日以内)心臓も停止する(心停止までに、長時間を要する例も報告されている)。植物状態は、脳幹の機能が残っていて、自ら呼吸できることが多く、回復する可能性もある点で、脳死とは全く違うものである。

(一) 〓 線部 A 「ゴクラク」、B 「センモン」、C 「ヘンチョウ」、D 「フモウ」を漢字に改めなさい。

(二) 〰 線部 a、b、c の品詞名を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 名詞 イ 動詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 副詞 カ 連体詞

(三) 〳 線部①「森鷗外^{おうえい}」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 次の中から森鷗外の作品を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雪国 イ 斜陽 ウ 舞姫 エ 破戒

(2) 森鷗外とともに明治の二大文豪とされる人物の名前とその作品を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

人物……ア	島崎藤村	イ	志賀直哉 ^{なおや}	ウ	芥川龍之介 ^{あくたがわりゆうのすけ}	エ	夏目漱石 ^{そうせき}
作品……ア	こころ	イ	地獄変	ウ	夜明け前	エ	城の崎にて

(四) ——— 線部②「死に対する『観』は急に貧困化した」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然科学の発達により、誰もが長く生きられるようになったため、人々はいずれ自分たちにも死が訪れるのだということを意識しなくなった。

イ 自然科学が発達し、その知識が急速に普及したことによって、人々は地獄や天国の存在を信じなくなり、復活の信仰も持たなくなった。

ウ 自然科学の発達に伴って、この世での生が快適で効率のよいものになったため、人々は極度に死を恐れるようになり、それについて考えることを避けるようになった。

エ 自然科学の発達により、生き方を重視する傾向がますます強くなって、死について折にふれ考えるということ、人々はあつと人間にしなくなった。

(五) ——— 線部③「日本人の死に対する知恵」を次のように説明しました。 [] に当てはまる十二字の表現を筆者がシンポジウ

ムで発言した内容の中から探し、抜き出して答えなさい。ただし句読点を字数に含めず。以下の問題も同様です。

[] を持っていたこと。

(六) 本文中の に当てはまる語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 普遍的 イ 常識的 ウ 恒常的 エ 全体的

(七) 次の一文は本文中の ㉞ ㉟ のどこに入りますか。最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

「㉞」では近代科学の方法において重要な地位を占める「実験」を行うことも不可能である。

(八) ——— 線部④『「感覚も意識もない」から死者だなどという『単純なもの』ではない』とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 脳死は科学的には死とみなされるが、大切な人がそのようになると家族は悲嘆に暮れてしまい、医師の説明を冷静には受け入れられないものだという事。
- イ 脳死は科学的には死とみなされるが、愛する者がそのような状態になったとしても、家族はいつまでも回復の望みを捨てられないものだという事。
- ウ 脳死は科学的には死とみなされるが、いくら科学的説明をされたとしても、精神的なつながりを持つ家族には受け入れられないものだという事。
- エ 脳死は科学的には死とみなされるが、喜びや悲しみを共にして暮らした思い出は、残された家族の心の中に永遠に残り続けるものだという事。

(九) ——— 線部⑤ 「現代の医療は死を敗北としてとらえ」とありますが、このようになる理由を次のように説明しました。
に当てはまる三十四字の表現を本文中から探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

現代の医療は であるから。

(十) この文章において、筆者は医療従事者に求められるのはどのようなことだと述べていますか。 線部「一個の身体」という語
を用いて五十文字以内で説明しなさい。

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

電話はすぐにつながった。のんびりした対応の担当者に用件を伝える僕の声は、自分ではそんなつもりはなかったが、事務所のスタッフには A コウギしているように聞こえたらしい。

受話器を置いたあとでそう言われて、逆に、電話で話しているときにはさほど感じていなかった腹立ちが湧いてきた。
「だって、ひどいだろう。 a 先月も電話で言ったんだぞ、同じことを」

「処理してなかったんですか？」と工藤くんが訊いた。

「先月とは別の店なんだ」

同じデパートのテナントでも、店ごとのつながりは b まったくない。考えてみればあたりまえのことなのだ。

「今度から、僕が電話しましょうか」

「いいよ、そんなの。プライベートのことなんだから」

「でも……いちいち説明するのは、キツくないですか？」

「楽しくはないけどな」

苦笑交じりに答え、「^①おかげで慣れたよ」と付け加えた。

和美宛てのダイレクトメールの発送を打ち切ってもらおうよう頼んだのだ。先週は近所の^Bケシヨウヒン店と自動車のディーラー、先々週は家電量販店…四月や五月ほど多くはないが、六月に入ってもまだ週に一、二通は^C届く。

発送リストから名前を^dはずすのは、思っていたより面倒だった。「ご本人さまからのご指示がないと処理できかねます」と先方に言われ、ものわがりの悪さに腹を立てながら、本人は電話をかけられないんだという説明を繰り返した。

「妻は四月に亡くなりましたので」——言うほうもつらいが、聞くほうもどう応えていいかわからなくなってしまおうだろう、絶句したあとで「それはどうも、ご愁傷さままで……」と早々に電話を切ってしまう担当者もいた、^Cキョウシユクしきった声で「申し訳ございませんでした」と詫^わびる担当者もいた。

「^Aこういうのって、^イ一括して名前を^ウ消せるようになったら^エ便利ですよねえ」

事務所の最若手の嶋岡^{しまおか}くんが、ポスター用のフォントをパソコンで加工しながら言うのと、資料コーナーから顔を出した村山くんが「[□]なんて言い方するなよ」と軽くたしなめた。

半年前に故郷の父親を亡くした村山くんも、いまの僕と同じようにさまざまな手続きに追われたと言っていた。亡くなったひと宛てのダイレクトメールが届く一方で、四十九日の法要をすませるまでは「ご遺族さま」宛ての仏壇や霊園のダイレクトメールが何通も届いていたのも、僕と同じだったらしい。

出力紙のカラー校正に一区切りつけた安藤さんが、「そういえば……」と言った。

「ウチのひいじいちゃん、十年ぐらい前に亡くなったんですけど、そのあとも、ひいじいちゃんが定期購読してた釣りの雑誌だけは何年もとりつづけたんですよ。ひいばあちゃんが、年金からお金振り込んで。わたし、それ聞いて、うわあ、いいなあ、って思っちゃって、ちょっと感動したんですよ」

「あ、それ、いいじゃないですか、泣ける話ですよ」と嶋岡くんが話を受けた。

「でしょ？ ひいじいちゃんが生きてるときは、そんなに仲のいい夫婦じゃなかったんだけどね、死んでから、すっごく仲良しになってるわけ」

「わかるなあ、そういうの、マジ、わかりますよ」

^②まだ二十代の二人の屈託のなさが、少しうらやましい。「じつはひいばあちゃんが釣りにハマってただけだったりして

な」と混ぜ返す村山くんと、「安藤んちのヒイババならありうるぜ」と笑う工藤くん、三十代の二人も、もう四月や五月頃のようにびりびりとはしていない。

やっと、オフィスでひとの死にまつわるおしゃべりができるようになった。四人のスタッフを抱えるデザイン事務所の社長として、それを素直に喜びたい。

四月は、電話で笑うことさえためらわれるような重苦しさに包まれていた。軽口を ときには必ず僕の顔色をうかがっていた五月——気疲れはスタッフよりむしろ僕にあったんだと、もうちょっとたったら、笑って打ち明けてやれるような気がする。

ふだんのペースに戻ったオフィスで仕事に追われていると、③ 時間が胸を素通りしていくのを感じる。

先月までは、胸の底にいつも重いものがあった。和美のことをとりたてて思いだすわけではなくても、なにをしても決して夢中にはなれなかった。悲しさや寂しさといった感情になって外に出ることがない重石が、ずっと居座っていた。僕が生きる時間はすべて、その重石に触れてしまう。時の流れ方が、いちいち淀んでしまう。ずん、と沈み込んでしまうこともあるし、流れからはぐれた木の葉が同じところを回りつづけるように、出口のない後悔にさいなまれることもあった。

いまでも、重石はある。なくなっただけではない。けれど、集中して仕事をしていると、胸にひっかかるものが消える。仕事が一息ついて初めて、ああ、ここにまだ重石があるんだ、と気づく。そのときの失望とも安堵ともつかない思いは、和美が亡くなるまでは味わったことのないものだった。

やがて、僕は重石に触れずに時間を流すコツを覚えるだろう。重石そのものも e 小さくなり、軽くなっていくはずだし、和美の D 面影も、思いださなければよみがえらなくなるかもしれない。そのとき、僕は、和美の死からようやく立ち直ったんだと喜ぶだろうか。それとも、和美を忘れてしまった自分を責めたてるだろうか。

スタッフが仕事に戻ったのを確かめて、机の抽斗ひきだしから葉書ファイルを取り出した。デパートの葉書を最後のポケットに収めると、三十六枚入りのファイルは、これですべて和美宛てのダイレクトメールで埋まった。

④ 余韻と呼ぶほどきれいなものではない。ただ、ここには、亡くなってからも生きつづけた和美がいる。業者の名簿の中でなら、ひとは永遠に生きることできるのだと、これも和美を喪うしなって初めて知った。

ファイルされた葉書の最初の数枚は、しわくちやになっている。二つに引き裂いたあと、テープで留めた葉書もある。自宅に届くダイレクトメールを最初に目にするのは、子どもたちだ。健哉が捨てた。大輔は、それを見て泣きだした。ママの名前が書いてあるものを捨てるのは嫌だ、と嗚咽交じりに僕に訴えた。⑤ 健哉は逆に、ママの名前を見たくない、と僕の胸ぐらにつかみかかるような勢いで言った。

「ママに來た手紙は捨てないよ」

僕は健哉の肩を軽く叩き、大輔の背中を抱き寄せた。

「でも、同じところから二度と來ないように、手続きするから」

子どもたちを納得させたあとで、ふと思った。僕自身はどうなのだろう。名簿の中で和美が生きていることは幸せなことなのか、不幸せなことなのか。名前だけの和美が「いる」ことは、嬉しいのか、悲しいのか。それは、最後の名簿から和美の名前が消えたときにしかわからないのかもしれない。

葉書ファイルを抽斗にしまい、工藤くんを呼んで仕事のスケジュールを確認した。

昨日までは事務所ぜんたいが息つく間もない忙しさだったが、今日から数日間は多少の余裕がある。

「今夜、みんなで焼肉でも食いに行くか」

僕の誘いに、二十代の二人はすぐさま「いいですねえ」「ビール飲みたかったんですよ」と応え、三十代の二人は声を揃えて「いいんですか?」と意外そうに、そして心配そうに訊いてきた。

「だいじょうぶだよ」と僕は笑う。「たまには、ぱーっとやろうぜ」とジョッキを傾けるしぐさをすると、ほんとうにいますぐにでもビールが飲みたくなってきた。

スタッフを連れて外で食事をするのは、和美が亡くなって以来初めてのことになる。

僕は⑥ こんなふうにして、少しずつ和美を忘れていく。

(重松清『その日のまえに』より)

(一) 〓 線部A「コウギ」、B「ケショウヒン」、C「キョウシユク」を漢字に改め、D「面影」は、読みをひらがなで答えなさい。

(二) 〜〜線部 a 「先月も電話で言ったんだぞ、同じことを」と同じ表現技法を用いている文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心地よい秋風が頬ほおをなでる。

イ 友達に一時間以上待たされるのは、今週はこれで三回目。

ウ 故郷の光景が自然と目に浮かんでくる、私に泣けと語りかけるかのように。

エ 空はどこまでも高く、海は限りなく広い。

(三) 〜〜線部 b 「まったく」と同じ種類の副詞を含むものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 急に空が暗くなり、たちまち雨が降り出した。

イ この方法で果たして十分な成果が上がるのだろうか。

ウ 雨天のため、試合開始までしばらく待たされた。

エ 先週、大きな手術を終えたが、経過は極めて良好である。

(四) 〜〜線部 c、f の活用形の名称の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 仮定形 カ 命令形

(五) 本文中の に当てはまる言葉をひらがな三字で答えなさい。

(六) ——— 線部①「おかげで慣れたよ」の説明として誤^う、て、い、る、もの、を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 妻宛てのダイレクトメールの停止をたくさんの相手に依頼しなければならず、うんざりしている。
- イ 同じデパートに入っているのに、テナントごとに妻の死を説明しなければならず、嫌気がさしている。
- ウ 妻の死を繰り返し説明するうちに、妻を亡くしたという現実を受け入れる覚悟ができた。
- エ 妻が亡くなったことを相手が知らない以上、それは何度でも説明しなければならぬのだと諦めた。

(七) 本文中の に当てはまる言葉を、その前の ——— 線部ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(八) ——— 線部②「まだ二十代の二人の屈託のなさ」とありますが、これは二人のどのような様子について言っているのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身内の死について、悲しみや寂しさにとらわれることなく語っている様子。
- イ 身内の死を笑いの種にすることで、職場の暗い雰囲気と和ませようとする様子。
- ウ 家族の死を経験しながらも、喪失感にとらわれることなく明るく振る舞っている様子。
- エ 夫婦の絆^{きずな}の深さを話題にすることによって、「僕」の悲しみを癒やせると信じている様子。

(九) ——— 線部③「時間が胸を素通りしていくのを感じる」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 妻を亡くした日で時が止まったように感じていたが、仕事に熱中している間だけは、以前と同じように時が流れていると感じられるようになったということ。
- イ 妻を亡くしてからというもの、悲しむあまり呆然^{ぼうぜん}として何もできずに過^{すご}してしまい、ふと気がつくとき長い時間が経ってしまった

ていたということ。

ウ 妻を亡くして以来、いつも暗く沈み込んだ気持ちを抱えていたが、今では仕事に集中していれば、その気持ちを感じずにいられるようになったということ。

エ 妻を亡くした悲しみは、時が経つことでしか癒やされないと気づいたので、しばらくの間は淡々と日々を過ごすしかないと思っ
ているということ。

(十) ——— 線部④「余韻と呼ぶほどきれいなものではない」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妻宛てに届く郵便物は、妻がこの世に存在していたことを示すものであるということ。

イ 妻宛てに届く郵便物は、妻が生きていた証あかしとなるようなものではないということ。

ウ 妻宛てに届く郵便物は、妻の存在をこれからもずっと感じさせるものになるということ。

エ 妻宛てに届く郵便物は、家族の絆を強めるきっかけとなるようなものではないということ。

(十一) ——— 線部⑤「健哉は逆に、ママの名前を見たくない、と僕の胸ぐらにつかみかかるような勢いで言った」とありますが、健哉がこのように言ったのはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。ただし、句読点を字数に含めます。以下の問題も同様です。

(十二) ——— 線部⑥「こんなふうにして」とありますが、これは「僕」がどのようにすることですか。次の に当てはまる言葉を本文中から十二字で抜き出しなさい。

。じゅ。